

ヴァルター・サンチェス新書記長とJCM代表団



世界大会とインダストリアル 第2期における期待について

金属労協／JCM議長 相原 康伸

国際社会は今、容認し難い格差と貧困の拡大、地球規模で拡大する暴力の連鎖等、深刻さを増す経済的・社会的な「分断」を強く憂慮しています。同時に、問題の拡大を食い止める労働組織、産業分野の行動と国際社会の連帯力が問われています。

その意味で、結社の自由・団体交渉権をはじめ、ILO中核的労働基準の確立・順守、良質な雇用とディーセントワーク、すなわち「働きがいのある人間らしい仕事」の発展を求める、インダストリアル・グローバルユニオンの運動の前進は、連帯する力を国際社会に示すひとつの希望です。

そのインダストリアル・グローバルユニオンは、グローバル・バリエーションをつなぐ、より強力な製造系国際産業別組織が必要との問題認識に基づき、2012年にデンマーク・コペンハーゲンで結成されました。

第2期を迎えた インダストリアルは 本格稼働のフェーズへ

I MF (国際金属労連)、I C E M (国際化学エネルギー鉱山一般労連)、I T G L W F (国際繊維被服皮革労組同盟)の3つのG U F (国際産業別労働組合)の活動を継続しつつ、統合による相乗効果や活動の統一化を目指した4年間の助走期間を経て、2016年10月、第2回世界大会をブラジル・リオデジャネイロで開催し、本格稼働のフェーズを迎えました。

第2回世界大会には、世界の99カ国324組合、1269名(うちJCM代表団63名)が参加し、運動の柱となるアクション・プランをはじめ、多くの討議が行われましたが、女性参画率や地域組織の充実・強化、納得性ある新たな加盟費体系など、いわゆる、重要課

題に関しては、相当程度、私たちの考え方が反映され、金属労協が求めてきた、さらなる「統合と改革」に向けた基礎を固めることが出来たと考えます。

背景には、ベルトホルト・フーバー会長が、多様な意見を尊重しつつ、公正かつ厳正に対処され、ユルキ・ライナ書記長が、論議の環境整備に努めてきたからに他なりません。残念ながら、本世界大会をもって、ご両名ともご退任となりましたが、この間の献身的な取り組みと金属労協の多くの仲間に向けて頂いた信頼と友情に心より敬意と感謝を表すと共に、金属労協として、第2期となるインダストリアル・グローバルユニオンの運動の前進に最大限貢献したいと思えます。

同時に、本世界大会においては、イェルク・ホフマン新会長、ヴァルター・サンチェス新書記長を始めとする、第2期の船出に相応しいリーダーシップ

を大会参加者全員で確認し、新体制を確立することが出来ました。金属労協は、この第2期においても、「労働者の権利の擁護」「組合の力の構築」「グローバル資本への対応」「不安定雇用との闘い」「持続可能な産業政策の促進」という5つの基本目標に沿って進められる、インダストリアルユニオンの運動を引き続き強力にサポートし、積極的に運動に参画して参ります。

第2回世界大会に臨むにあたり

さて、金属労協は、第2回世界大会に臨むにあたり、執行委員会、各種の専門委員会において、私たちの考えをその都度、率直かつ建設的に主張して参りました。

とりわけ、私たちは、「各地域における活動の重要性」、並びに、「地域活動の充実に資する環境整備の必要性」の観点から、

●地域特有の課題解決には、加盟組織・現場に近い活動の充実が不可欠であること
●課題解決に向け地域事務所が担っている様々なプロジェクトを発展的に整理・統合し、限りある地域の資源を有効に活かす必要があること

●地域のメンバーのより一層の参加を得ながら、地域のアクション・プランづく

くりとその進捗管理を全員で行い、課題を解決して行く必要があることなどについて、訴えて参りました。

その結果、本部の活動に地域の声を反映させる主旨から、副会長を「旧3G U Fの代表」から「地域代表」に変更し、今後、副会長を「各地域の代表」として位置づけ、各地域における課題や状況について「本部書記長の窓口を務めることができる」旨、新たに規約に盛り込まれました。また、規約第28条では、「地域事務所は、議長と協力し、地域組織の活動を実行する」と規定されたなど、金属労協の課題意識を十分に反映した結論を大会の総意をもって確認出来たことを高く評価したいと思えます。

インダストリアル日本加盟組織として、金属労協としての今後の取り組み

また、この度、金属労協、化学・エネルギー産業が所属するインダストリアル・J A F、U A センセンのインダストリアル日本加盟3組織のインダストリアルに関する共通機能を二つにまとめ、新たに国別協議会「インダストリアル・グローバルユニオン日本加盟組織協議会（Industrial JLC）」が結成され、



第2回世界大会での相原議長 意見表明

す。従い、建設的な労使関係の拡大は、その為の前提条件であり、一層の運動強化が求められます。

また、世界の国々に共通する政治課題は、持続的成長と格差の改善にあります。同時に、I O T、ビッグデータ、人工知能、ロボットなど、インダストリー4.0、インダストリアル・インターネットという爆発的な技術革新の波への対応も不可避です。

世界の英知は、今後迎える技術革新をデューセントな労働の未来と調和する壮大な装置として、グローバル経済、社会に適切にビルトインさせなくてはなりません。技術革新のエネルギーを経済的・社会的な「分断」ではなく「統合」に向かわせる為にも、金属労協は、インダストリアル・グローバルユニオンを舞台として、より一層、諸課題の克服に挑戦して参ります。

結びに、この度、多くの同志のご理解を得て、「アジア太平洋地域共同議長」「副会長」、さらには、国内新組織のインダストリアル・グローバルユニオン日本加盟組織協議会の「議長」の職にそれぞれ就かせて頂くこととなりました。職責の重さを深く認識し、同志のご協力を賜りながら、その任務に相応しい成果を見出して参りたいと存じます。今後とも宜しくお願

い申し上げます。

グローバル化と共存共栄

金属労協/JCM副議長・電機連合中央執行委員長 野中 孝泰



1. はじめに

電機産業においてはこの20年間、グローバル競争が激化する中、経営のグループ&グローバル化と共に事業構造・雇用構造の改革が推し進められてきている。今回の大会には中調組合の委員長を中心に女性を含む21名が参加させて頂いた。皆さん其々に気づきがあったと確信している。私自身も国内から眺めて知っているつもりだった世界と各国で起きている実態の違いを改めて知る大変貴重な機会となった。今回の寄稿では、はじめに大会運営や議論を通じての気づき、次に今大会で退任をされたフーバー会長並びにユルキ書記長に敬意を払う意味からご両名の思いの受け止め、そして最後に私なりの国際労働運動に対する思いを述べさせて頂く。

2. 気づき

①時間や運営について

開催予定時刻になっても、全員が揃っておらず立ち話があるからこちらで行われている大会会場。そしていつ始まるのかわからない状況に正直驚いた。また大会途中でも舞台上に踊りながら大行進するお祭りの雰囲気にも驚いた。あらかじめ予定はされているのだろうが。日本人の時間を守る運営や生真面目さか？他国の人々の柔軟性や大らかさか？ そう言えばユルキ書記長の冒頭の挨拶で『相互 尊敬の念 寛容の念にて』と言われた意味が良くわかった。日本の常識は世界の常識にあらずを最初に思い知った。

②労働組合の結成の思い

世界ではまだまだ労働組合の結成を良しとしない国々が多くあることに驚いた。そして働くものの尊厳と権利を守るために、それこそ命をかけて取り組んでいる姿。必死なのだ。日本にも約8割の未組織労働者がいる。年間約25万件の労働争議の相談があり、大半は労働組合がないと聞く。連合評価委員会で指摘されているように不条理に対する怒り、国民の共感を得る運動を私たちこそ本気で起こさないといけない。

③信頼の労使関係

一方で、労使関係が敵対のままでは何の解決にもならない。もちろん日本の戦後の労働運動も抵抗、要求、そして参加の時代と質的に転換している。社会の成熟と共に労使関係が進化するのであろうが、世界で起きている労働争議、労使紛争の現状を見ると、まずは労使の徹底した対話と信頼の構築が重要だと感じる。これは組合だけでなく、経営者にも求めなければならない極めて重要な価値観だと感じた。

④グローバル化と共存共栄

国内のものづくりが海外へ移転し国内産業の空洞化を常に懸念する時代。海外市場の取り込みや為替の変動等理由は様々だろうが、グローバル企業にとって『グローバル競争に勝つ』とは私達が普通に使っている言葉であることに間違いはないだろう。海外の国々で、とりわけ新興国において大問題となっている不安定雇用や低処遇、劣悪な労働環境。コスト競争に勝つために行われているとすれば他人事では済ますことは出来ない。競争に勝つという価値観から共に存在し共に繁栄する価値観への転換が必要である。企業は社会の公器として世界の人々からリスペクトされることが大事だ。

3. ベルトホルト・フーバー初代会長、ユルキ・ライナ初代書記長の思いの継承

お二人の言葉で特に印象に残っているものを紹介させて頂く。フーバー前会長は私達を取り巻く情勢認識として『不安定の継続。人々と社会が内部から破壊されてきている。皆が協力して解決しなければならないはずだがそうならない。グローバル化そのものがいけないのではない。公正と社会的平和を目指さなくてはならない』更に『アジアは目覚ましい発展をしているが恩恵は少数だ。7億人以上が貧困だ。人権侵害がある。環境保護、エネルギー問題、劣悪な環境で働いている、これが現状だ!』そして『世界の人権と労働のために団結して戦おう』と呼びかけられた。

またユルキ前書記長は、これらのことに対応するためには『信念が必要だ!』と発信されたが、本人の行動にもそのことを強く感じる。お二人に共通する労働運動家としての使命感。私達に『どれだけ本気でやっているか?』と問うている。

4. 国際労働運動への思い

グローバル化の進展と国際経済秩序～全員参加型秩序を如何に築くのか?

世界の多極化、不確実性が増す時代、国際秩序や国際合意形成が困難になっている。企業のグローバル化と競争の激化は更に進むだろう。まずは世界で起きている現実を知ること。向き合うこと。その上で『共存共栄』という価値観の醸成。加えて日本の強みである労使協議制の浸透。『信頼をベースにした健全な労使関係』の構築やそのための『人材育成』など、日本がたどってきた歴史・経験を活かした取組みで貢献出来ることが多くあるように思う。

インダストリアル 第2回世界大会に参加して

金属労協/JCM副議長・JAM会長 宮本 礼一



インダストリアル・グローバルユニオンの第2回世界大会および関連する諸会議が、10月4日～同7日にブラジルの第2の都市で国内最大の港湾物流拠点であるリオデジヤネイロ市のウインザーオセアニコ・コンベンションホールで開催された。

今回の大会は、2012年6月に結成大会を開催して以来の世界大会であり、全世界から99カ国・約1200名が参加した。日本組織からは代表団107名が参加し、うちJCM代表団63名（JAMから8名）が参加した。

今回の世界大会では、女性の参画率向上が課題の一つとなっていたこともあり、JCM代表団の女性比率は30.2%（JAMは37.5%）を占めることとなった。

世界大会の前日には、アジア太平洋地域の大会が同会場で開催され、本年5月にフランクフルトで開催した執行委員会の議事録を確認するとともに、アジア太平洋地域執行委員の選出に併せて、同地域共同代表候補としてJCM相原議長とオーストラリアのミシェル・オニール氏を確認した。なお、同地域を代表するインダストリアル副会長候補として、相原JCM議長が指名された。

会場では、世界大会開催に先立ち、世界6地域の大会、女性委員会、執行委員会が開催された他、世界大会開会式では、ダンスショーなどの華やかなパフォーマンスが披露され、参加者から盛大な拍手が送られた。

また、大会来賓として、汚職スキャンダルで辞任に追い込まれたブラジル金属労組出身のルーラ元大統領が来場し、ルーラ氏からは来賓としての祝辞なのか、汚職事件のグチなのか解らないような挨拶であったが、同氏を支持する大会参加者からは盛大な拍手が送られた。

世界大会では、3日間にわたり全体会議を開催し、①インダストリアル結成大会以降から現在までの活動報告、②4年間の財政報告・監査報告、③規約改正（執行委員定数、新加盟費と移行措置、女性参画推進など）、④地域代表の副会長選出と任務、⑤役員選出、⑥2016～2020年アクションプランなどについて、ベルトホルト・フーバー会長からの提案に続き、各国代表からの発言の後に採択するとともに、7本の政治決議も併せて採択された。

ユルキ・ライナ書記長からは、4年間の活動として、①労働者の権利擁護、②労働組合の力の構築、③グローバル資本との闘い、④不安定雇用との闘い、⑤持続可能な産業政策について計画に沿って活動してきたことと、組織拡大は7%増に留まったことを報告するとともに、女性参画や役員の登用については、全世界の組織で取り組むよう促した。

また、インダストリアルからの情報発信については、SNSなどの情報発信ツールを積極的に活用していくとの説明があった。

女性参画問題については、「努力目標40%」という数値が示されているが、企業別労働組合が中心という労働組合組織の状況などを勘案すると、目標達成にむけた工夫や段階的な対応も必要と感じる。

役員改選では、新会長にドイツ・IGメタルのイェルク・ホフマン氏、新書記長にブラジルのヴァルター・サンチェス氏が選出された他、相原議長がアジア太平洋地域の地域共同代表およびインダストリアルの副会長に選出された。

JCMからは浅沼事務局長が登壇し、生産現場でのデジタル化の進展を想定した雇用の確保や職業訓練が不可欠であり、産業横断的な部会としてホワイトカラー部会のような組織の必要性を訴えた。また、地域と本部の活動課題の整理が必要との認識に立ち、今後の執行委員会での検討を本部に要請した。

加えて、関係各国代表団が協定反対を掲げているTPP問題については、自由貿易協定の全てを否定すると、良質な雇用機会の拡大を妨げるなど、光と影の側面に配慮しつつ、公正な世界貿易を認めるべきとのJCMとしての見解を示したことは、重要なポイントである。

各国代表団からは、日系企業を含むグローバル企業の実名を挙げて、団体交渉応諾拒否の実態などの報告が相次いだ。一部の発言者からは、現地日系企業での職場環境の整備や雇用への配慮について賞賛する声もあった。

JCMは有力なインダストリアル構成組織の一つとして、またアジア太平洋地域のリーダー役を担う組織として、その役割を担わなければならないことを改めて感じた世界大会でもあった。

インダストリアル 第2回世界大会に参加して

金属労協／JCM副議長・基幹労連中央執行委員長 工藤 智司



国際労働運動は今後益々重要になる。日本の労働組合にとっては海外へ事業体における建設的な労使関係の構築や安全衛生職場の確立などの目的があり、更にグローバル経済の加速・第四次産業革命の進展・地球環境問題など一国では解決できない人類が克服していかなければならない課題に対し、世界中の労働組合が「働く仲間の代表」として如何に関与していくかが問われているのだと思う。さらに、「労働の尊厳を守るための闘い」にも手を差し伸べていかなければならない。まさにそのようなタイミングで第2回世界大会が開催された。

今回の第2回世界大会に参加して感じた事であるが、本質的にものづくり産業を持続可能なものとしてどのように発展させていかなどの視点からの発言が少なかったように感じた。途上国は労働組合として戦っている姿勢を見せる事に終始しているとも感じた。裏を返せば、世界はそれだけ「労働の尊厳を守るための闘い」をせざるを得ない状況なのだろう。一方で各国・各地域・各出身組織の色が強く出たのが「女性の参加比率をどうするか」「会費水準をどうするか」などギリギリまで調整した部分に対する発言であった。結成して4年の新組織なので、組織運営をどのように行っていくかといった観点がまだまだ重要なのだろう。これからの4年間では是非、「持続可能な産業政策をどのように実現していくか」「労働の尊厳を如何に守っていくか」といった視点からの議論がますます活発となる事を期待する。

全世界の労働組合組織率は10%以下であり途上国での組織率が低いのも事実である。さて、経済がグローバル化するのに従い労働運動も益々グローバル化する。ここで我々が考えなければならないのは、国際労働運動

を如何にして職場第一線の組合員にまで共感を得る運動としていくかという事ではないか。現時点においても現場では生産活動が行われJCM傘下の組合員はそれぞれすべての大陸、海上で働いている。組合役員・組合員とキャッチボールし共感を得る取り組みを一層強化していかなければならない。

一方で見て見ぬ振りが出来ないのも事実である。基幹労連も世界中の同じ産業内の様々な仲間と連携し運動を進めている。その中でも船舶解撤産業では多くの方が“世界一過酷”と言われる職場で働き命を落としている。安全衛生に関する基準が根本的に異なる。今現在、たった一国のたった一か所の支援しか出来ていない。しかし一人の命を救う活動がいつの日か多くの仲間の命を救う事になると信じて活動を続けている。

労働運動は約300年前に第一次産業革命により労働集約型の働き方が行われ発生した。現在、第四次の産業革命が進行している。働き方は技術進歩により変わる。これに対し労働組合は正確に把握して運動を変えていかなければならない。組織化・産業政策・労働政策・組織活動・広報すべてが変わってもおかしくない。一方で格差・差別が蔓延している事も見逃してはならない。

各組織ウイングの広げ方は様々だと思う。ある先輩が「労働運動は運動であるから止まってはならない」と言われていたのを思い出した。JCMの力を合わせ前に行こう！

雑感として。ご安全に！

A Luta Continua Rio 2016 に 参加して

金属労協／JCM副議長・全電線中央執行委員長 岩本 潮



第2回となるインダストリアル・グローバルユニオンの世界大会が、2016年10月4日～10月7日にかけて、ブラジル・リオデジャネイロにて開催された。JCM 代表団63名、インダストリアル・JAF代表団、UAゼンセン代表団を含めた日本代表団としては、107名の参加となった。10月4日の開会式前段に行われたインダストリアル・アジア太平洋の地域大会においては、共同議長の選出や相原議長をアジア太平洋地域としてインダストリアル副会長に推薦することを確認した。限られた時間のなかで、各国代表者の意見には、議題と異なる自国の労働問題などが発言されそうになるなど、大会に臨む各国代表者の思いの強さを感じる一方で、前段から舵取りの難しさが垣間見え、世界大会に向けてこれまで、各議案等に対する考えの異なる部分をどのようにソフトランディングさせるか、地道に調整してきたJCM国際局をはじめとする関係者の方々のご努力を再認識した。

大会会場は壇上の後壁全面にディスプレイパネルが設置されており、組織イメージや運動・連帯、開催地ブラジルの文化等のメッセージ映像が迫力の音響とともに流される印象的なオープニングで開会式がスタートし、ブラジル金属労組の出身で元ブラジル大統領のルイス・イナシオ・ルーラ・ダ・シルバ氏が挨拶され、現地の代表を中心に大喝采となった。ルーラ氏のことをネット検索すると「大学の学位がないと何度も非難されてきたこの私が、生まれて初めて免状を手に入れます。それがわが国の大統領という称号です」といった言葉があり、現場からスタートし、相当な努力をされてきた方であることを知り、労働に携わる者として共感するとともに、現地の熱狂ぶりが理解出来た。オープニングの他にも特徴的であったのが、インターバル?の時間(予定には無い)に行われる様々な現地のダンスやネットの活用で、大会の様子はライブ発信され、SNSによる拡大と共有化が図られていた。

議題の「女性参画の推進に関する規約改正」については、ぎりぎりまで調整努力がされた結果、40%の代表制の目標を導入するとして承認がされたが、代表者のなかには、もっと上の50%縛りを主張することを理由に反対する意見もあり、今後の運動においても女性委員会での粘り強い議論が求められるものであると感じた。

大会のテーマである「未来への闘い」(Fighting Forward / A Luta Continua)で、「闘いは続く」の合言葉のもと、「アクション・プラン」や「政治決議」における各国代表者の多くの発言があり、「不安定雇用」「低賃金」「長時間労働」といった共通の問題も多くあったが、不当な例として仲間の出身母体かもしれない他国の企業グループを名指しで取り上げることや、「搾取されている」という強い表現に驚かされた。こうした各国代表の熱弁の反面、100人を超える発言者を予定していても、持ち時間オーバーを気にせず発言しつづける発言者(発言時間を伝えられていても文章変更していない)が多いことや大会後半に会場を離れている人が多かったことは、「共闘」は良くとも、「協調」としては残念な思いであるのが日本代表団の総意であったと思う。

しかしながら、世界の仲間が抱える問題を共有し、あらためて日本の平和的、建設的な労使関係の大事さと、そうした環境のありがたさを忘れず、次代にもしっかりと残していかななくてはならないと思った。産業・企業、日本経済の健全な発展を求める一方で、グローバル化が進展するなかには、「世界中に働く人々の権利と共通の利益を促進・擁護」していくとするインダストリオールの目的からも、こうした労使関係の構築を世界の仲間を広げていくという、社会的な責任があり、その重みが増していると感じた大会であった。